

重要文化財（古文書） 津山松平家文書



津山松平家文書（日記）



同（城下町絵図）

本文書は、美作国津山藩主であった松平家に伝来した文書のうち、元禄十一年（1698）から明治四年（1871）までの津山藩の藩政に関わる文書を中心にしたもので、五,三九九件（七,一五一点）を数える。津山藩松平家は、徳川家康の二男秀康を祖とする。忠直・光長を経て、

^{ながのり}長矩（後の^{のぶとみ}宣富）が元禄十一年一月、森家改易後の美作国のうち十万石を拝領し、津山に入封した。その後、領地が五万石に半減となった時期もあったが、明治四年の廃藩置県までの九代約 170 年にわたり存続した。廃藩置県以後、藩政文書を含む文書・記録・書籍類は、津山の松平家事務所倉庫及び東京の松平邸に保管されていたが、昭和三十四年に津山市に寄付された。

津山藩松平家文書の藩政文書には、藩士の勤書、領内の田畑山林名寄帳、日記類、支配の手引書である御定書、絵図類がある。中でも 2,000 冊を超える日記類には、津山場内の御用所で作成された国元日記、江戸藩邸で作成された江戸日記、藩主の日常の様子などを記した小納戸日記、町奉行日記、郡代日記、勘定奉行日記などがある。量・種類ともに豊富な日記類は、県内の藩政文書には例がなく、特筆されるものである。また、明治維新後の編纂物で、現在「渋紙表紙編纂物」と称されている文書は、家史編纂の一環として作成されたと考えられ、藩政時代の重要事項がまとめられており、日記に次ぐ重要な史料となっている。

このように本文書は、江戸時代の津山や美作地域を研究する上で重要であるとともに、家門大名の家臣団形成や幕府・他藩との交際、江戸藩邸の機能など、幕藩体制を研究する上でも有益な史料となっている。

史跡 津山藩主松平家菩提所^{たいあん}泰安寺



津山松平家菩提所 泰安寺（本堂）

泰安寺は浄土宗知恩院の末寺で、津山城の南西にある西寺町のやや東寄りに位置し、城下町形成当時は四周を寺院で囲まれていた。元は美濃国金山にあった涅槃寺^{ねはん}が、森忠政の津山入封の際移転されたもので、元文四年（1739）涅槃寺から泰安寺と名を改めた。また、元禄十一年（1698）に徳川家康の二男秀康を祖とする松平長矩（後の宣富）が津山に入封して以後、同家の菩提寺となっている。このこともあり、十八世紀末期から十九世紀中期にかけて境内が拡張されるとともに、天保九年（1838）の七代藩主松平齊孝^{なりたか}死後、霊屋等の建造物が建築され、大名家の菩提寺として整備されていった。

本堂は、桁行八間、梁間八間、正面向拝付き、入母屋造本瓦葺の大型本堂で、寛永二十一年（1644）の建築である。寛政七年（1795）に修理が行われているが、江戸時代初期の浄土宗本堂としての形態を良く保っている。松平家代々の位牌と初代将軍徳川家康から八代将軍吉宗までの位牌等が祀られている霊屋は、天保十三年（1842）の建築であるが、向拝を向唐破風造とするなど、格式を感じさせる上質な建物である。表門はやや大型の一間薬医門で、本堂と同時期とみられる優作である。このほか、江戸時代後期に建築され藩主の参拝や仏事等に使用された客殿や庫裏をはじめ、不動堂（旧経蔵）、弁天堂、森家二代藩主長継^{ながつぐ}の第十三子大吉や津山で死去した松平宣富、同齊孝の墓塔などの建造物が境内に建ち並んでいる。

泰安寺は、津山藩主松平家の菩提所として拡張・整備され、近世大名家の菩提所を構成する建造物や境内景観がよく保存されており、近世大名家の墓制あるいは儀式等を知る上で貴重である。